

# 比較文化学科 卒業認定・学位授与の方針 (ディプロマ・ポリシー)

文学部比較文化学科は、基盤教育による基盤力に加え、比較文化学に関する専門教育を通して、以下の能力を有すると認めた者に学士(比較文化学)の学位を授与します。

## ■ 豊かな「知識」

文化資源の保存・活用及び多様な文化の交流・共生について幅広い知識を身につけているとともに、文学、思想、言語、歴史、美術、宗教、生活文化、メディアなどの自らの専門分野について体系的に理解している。

## ■ 知識を活用できる「技能」

英語もしくはそれ以外の諸言語を用いて基本的なコミュニケーションができるとともに、専門書など必要な文献を読みこなすことができ、自らの専門分野についての研究方法を身につけている。

## ■ 次代を切り開く「思考・判断・表現力」

文化資源・文化共生の課題について、論理的に思考し判断する力と、自文化を論理的かつ的確に発信する力を身につけている。

## ■ 組織や社会の活動を促進する「コミュニケーション力」

文化資源・文化共生の学修を通して、地域社会におけるつながりを創り出す力と、他者と協働し、組織や社会の活動を促進する力を身につけている。

## ■ 社会で生きる「自律的行動力」

文化資源・文化共生への理解を通して、地域・国際社会における文化の振興と交流に貢献する姿勢を身につけている。

### ～その基盤力として、基盤教育で次の力を身につけます～

- ・地域・環境・世界(地球)の分野を中心として、社会で生きていくための基盤となる幅広い知識を有している。
- ・英語などの基礎的運用能力、情報リテラシー、資料等を読み解く技能を身につけている。
- ・多様なものの見方、考え方、価値観などを理解し、思考・判断することができる。
- ・個人の異なる生き方や価値観を理解し、社会と調和し、組織や社会の活動を促進することができる。
- ・他者との関わりの中で自己を律し、自己のキャリア形成に向けて継続して学び、公共性、倫理性を持って行動できる。

※ 基盤力の詳細は基盤教育センターのページを参照

# 比較文化学科 教育課程編成・実施の方針 (カリキュラム・ポリシー)

文学部比較文化学科では、卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）を実現するために、以下のとおり教育課程を編成し、実施します。

## 教育課程の編成

### (編成の方針)

- 1 比較文化学科では、1年次から4年にかけて文化資源の保存・活用及び多様な文化の交流・共生に関する基礎から応用に至る知識及び英語もしくはそれ以外の諸言語によるコミュニケーションと専門分野に関する研究方法のスキルを修得するとともに、地域や国際社会における文化の振興と交流に貢献する姿勢を身につけることを目指して、順次性、体系的のある教育課程を編成する。
- 2 教育課程には、文化資源・文化共生について論理的に考察し、地域社会におけるつながりを創り、他者と協働して組織や社会の活動を促進しつつ、自身の考えや判断のもと自文化を発信できるよう、3、4年次に演習・卒論科目を配置する。
- 3 以上の専門教育科目に加え、社会で生きていくための基盤力を育成する基盤教育科目をもって比較文化学科の教育課程を編成する。

### (教育課程の構成)

※()は卒業に必要な最低単位数で、卒業要件単位数 124 単位の内訳

比較文化学科の教育課程は、編成の方針に基づき、専門教育科目(84)と基盤教育科目(40)で構成する。

「専門教育科目」は、「入門科目」「英会話英作文・文化講読科目」「比較文化科目」「演習・卒論科目」の4つの科目群から成り、順次的、体系的に編成する。各科目群の編成は次のとおりとする。

- 1)「入門科目」(4)は、文化資源・文化共生について学ぶための基礎となる専門教育科目であり、1年次に配置する。
- 2)「英会話英作文・文化講読科目」(8)は、英会話・英作文及び、日本語の古典や専門文献、欧米諸言語による文献を読みこなす力を育成する講読科目で構成し、1年次から順次履修できるように授業科目を配置する。
- 3)「比較文化科目」(48)は、「文化資源領域」と「文化共生領域」から成り、各領域の研究に必要な専門知識と方法論を学修するため、1年次に導入科目を、2年次以降に専門性の高い科目を配置する。2年次以降、専門的な知識と方法論を学修できるよう授業科目を配置する。
- 4)「演習・卒論科目」(14)は、指導教員のもとで自ら課題を設定し、考察・解決できる能力の修得を目的として、3、4年次に配置する。

## 教育の内容・方法

- ・ 授業は、講義、演習、実験、実習若しくは実技のいずれかにより、又はこれらの併用により行う。
- ・ 学生が主体的に学び、協働して課題解決に取り組むとともに、学習意欲・関心を高め、生涯にわたって学び続ける力を養うため、問題発見学習、調査学習、グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション、課題解決型学習(PBL)など能動的学習(アクティブ・ラーニング)の手法を授業形態に応じて効果的に取り入れる。
- ・ 学外での学びの機会を積極的に取り入れるなど、学生の主体的な勉学意欲を促進するとともに、卒業論文の作成を念頭においた授業時間外での自律的な学習態度を身につけさせる。
- ・ 予習・復習等、授業時間外の学修について、学修行動調査などによる調査・把握を行いながら、シラバスへの内容記載や授業での喚起等により、適切な学修時間の確保を促す。
- ・ 単位の実質化を図るため、履修登録単位数の上限を各学期 26 単位とする。

## 学修成果の評価

- ・ 授業科目の成績評価は、試験、受講態度、並びにレポートや課題、ディスカッション、プレゼンテーションへの取組状況や成果などによって厳格に判定する。成績が一定の水準に達したと認められた場合に、所定の単位を認定する。
- ・ 3年次に進級するためには、2年次終了までにおいて、所定の科目を含めた 54 単位、卒業の要件は、所定の科目を含めた 124 単位以上の修得を必要とする。
- ・ 各授業科目の成績を基礎とした総合的な学業成績として、累積 GPA を算出し、成績優秀者表彰や早期卒業、留学対象者の選定などに用い、学修意欲の向上を図る。
- ・ 学生への授業評価・学修行動調査等を実施し、個別科目での学生の理解度や各講義・授業への要望をはじめ、学修達成状況などを把握し、その結果を授業や教育課程の改善に役立てる。

## 比較文化学科 入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）

文学部比較文化学科は、次のような人を求めます。

（求める学生像）

- 継続的かつ自主的に学ぶ姿勢を身につけており、多様な文化への好奇心が旺盛な人
- 異なる文化的背景を持つ人とのコミュニケーションに積極的な人

（求める能力、入学者選抜における重点評価項目） ※特に評価する項目に「○」をつけています。

		知識・技能	思考力・判断力・表現力等の能力	主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度
<b>求める能力</b>		・多様な文化を学際的、総合的に研究するのに必要な基礎的な学力を持っている。	・文化に関する諸問題について、他者の考えを理解した上で自分の意見を論理的かつ的確に表現する力を持っている。	・多様な価値観や異なる文化的背景を尊重しつつ、他者と協働関係を築き、問題解決に臨む態度が身についている。
一般選抜 (前期日程)	大学入学共通テスト	○		
	個別学力検査 総合問題（現代文と英語の理解力、表現力、語彙力を問う）		○	
一般選抜 (後期日程)	大学入学共通テスト	○		
	個別学力検査 小論文（現代文の理解力、表現力を問う）		○	
学校推薦型選抜(全国推薦・地域推薦)	基礎学力テスト等 小論文		○	
	推薦書、調査書	○		
学校推薦型選抜(特別推薦)	基礎学力テスト等 小論文		○	
	推薦書、調査書、活動・資格等の実績、入学希望理由書			○
帰国子女学生特別選抜	個別学力検査等 小論文		○	
	面接			○
外国人留学生特別選抜	日本留学試験	○		
	個別学力検査等 集団討論		○	
	面接 (TOEFL 又は TOEIC)	○		○
編入学	個別学力検査等 小論文		○	
	面接 (入学希望理由書)			○